

## Highly sensitive children と養育者の悩みに関する文献検討

古藤雄大<sup>1)</sup> 古屋肇子<sup>2)</sup> 小島賢子<sup>3)</sup>

大阪青山大学健康科学部看護学科

Challenge of highly sensitive children and their families: a literature review

Yuta KOTO Hatsuko FURUYA Satoko KOJIMA

Osaka Aoyama University Faculty of Health Science School of Nursing

### 要 旨

Highly sensitive childrenは感覚の感受性が高く、敏感な子であり、生活上の様々な場面で困難を抱えている。また、養育者や支援者もHighly sensitive childrenへの対応の仕方に悩みを抱えている。そのため、これまでに本邦でHighly sensitive childrenに関して行われてきた研究を概観するとともに、養育者や支援者が抱える課題と研究の限界を明らかにするため、文献検討を実施した。医学中央雑誌での検索によって11件の論文が包含された。11件研究の内、Highly sensitive childrenを明確に定義したものは2件であった。また、養育者を対象とした論文は3件であった。このことから、本邦におけるHighly sensitive childrenに関連した研究が十分実施されていないことが示唆された。また、支援や研究の対象としてのHighly sensitive childrenの定義が十分に定まっていないことが課題であると考えられた。現状では、Highly sensitive childrenの個々人の生活上の困難に合わせた支援方法について保護者と支援者で協力して検討していくためのアプローチや調査研究が求められる。

**Key words :** Highly sensitive children, Childcare, Literature review

キーワード：非常に敏感な子，保育，文献検討

### I. 緒言

Highly sensitive person (HSP) は一般的に、感覚の感受性が高く、敏感である人と定義されている。AronらによるHSPに関する古典的研究では、感覚の処理感受性における個人特性が提唱されている<sup>1)</sup>。Aronらによる一連の研究によって、HSPが内向性や神経症などの傾向とは異なる概念であることが明らかとなっている。また、感覚処理感受性を測

定するための尺度が開発された<sup>1)</sup>。この尺度を用いた研究の結果から、HSPを構成する概念には、低感覚閾と易興奮性、美的感受性の3因子が報告されている<sup>2)</sup>。HSPの抱える問題について、これまでの研究からHSPの主観的幸福感が低いこと<sup>3)</sup>や、母親の不承認が重なることで自傷傾向が高まる可能性<sup>4)</sup>が示唆されている。

HSPは主に成人を対象とした集団であるが、特に小児を示す場合はHighly sensitive children (HSC)

が使用される。HSPと異なり、HSCでは本人に関わる課題だけではなく、子育てにおける養育者や支援者の困難が生じる可能性が推測される。HSPと同様に、HSCの感覚処理感受性に焦点を当てた測定尺度が開発されている<sup>5)</sup>。この尺度は日本語でも青年期版が作成されている<sup>6)</sup>。そのため、今後、日本のHSCが抱える課題や支援の効果が明らかとなることが期待される。

一方で、HSCや養育者への支援は保育や臨床の場において喫緊の課題である。特に、HSC本人ではなく、養育者や支援者に着目した研究は限られている。しかし、養育者らへの適切な支援を検討することは小児看護学領域における重要なトピックである。そのため、我々はこれまでに本邦でHSCに関して行われてきた研究を概観するとともに、養育者や支援者が抱える課題と研究の限界を明らかにするため、文献検討を実施した。

表1 検索戦略

データベース：医学中央雑誌 / 検索日：2022年5月24日

#	検索単語	該当件数
1	Highly/AL and sensitive/AL	207
2	知覚過敏/TH or 知覚過敏/AL	2,703
3	感覚特性/AL or 感覚過敏/AL or 敏感/AL	2,250
4	#1 or #2 or #3	5,000
5	(#4) and (PT= 会議録除く)	3,910
6	(#5) and (PT= 解説, 総説, 図説, Q & A, 講義)	1,555
7	#5 not #6	2,355
8	(#7) and (DT=1997:2022)	1,468
9	(#8) and (CK= 新生児, 乳児 (1~23ヶ月), 幼児 (2~5), 小児 (6~12), 青年期 (13~18))	299

#### 4. 包含基準/除外基準

明確にHSCが定義されていない文献であっても、HSCに該当することが妥当であると考えられた文献を含む。これには一般人口を対象とした研究の中で、結果としてHSCと考えられる群を含むものも対象となる。また、対象者の年齢は0歳から18歳とする。論文の中で、18歳以下の結果が示されている研究は包含する。

発達障害や脳性麻痺などの神経や感覚器に関連した診断がなされている対象に関する研究は除外する。

#### 5. 研究の種類

この文献レビューでは、原著論文及び報告、資料、症例検討を含む。会議録や総説、解説は含まない。

## II. 方法

### 1. データベース

医学中央雑誌Web版

### 2. 検索日時

2022年5月24日

### 3. 検索戦略

検索単語には、HSCの他に、生理学的な感覚の過敏に関する論文を包括するため、感覚特性や感覚過敏などを含むこととした(表1)。レビューでは、AronらによるHSPに関する報告後を対象とするため、検索対象は1997年以降とする。

## III. 結果

### 1. 検索結果概要

医学中央雑誌での検索の結果299件のレコードが抽出された(図1)。また、これに含まれなかったが、事前の検討からHSCに関連すると判断した4件の文献<sup>2,7-9)</sup>を含む、303件のレコードがスクリーニング対象となった。題名と抄録の内容からHSCと関連がないと判断された282件のレコードが除外され、21件の論文が全文スクリーニングの対象となった。

全文スクリーニングの対象論文21件のうち、HSCおよびその養育者に関連した知見が報告されている論文11件をレビュー対象とした<sup>6,10-18)</sup>。全文スクリーニングで除外された10件の論文の除外理由は表2に示す通りである。

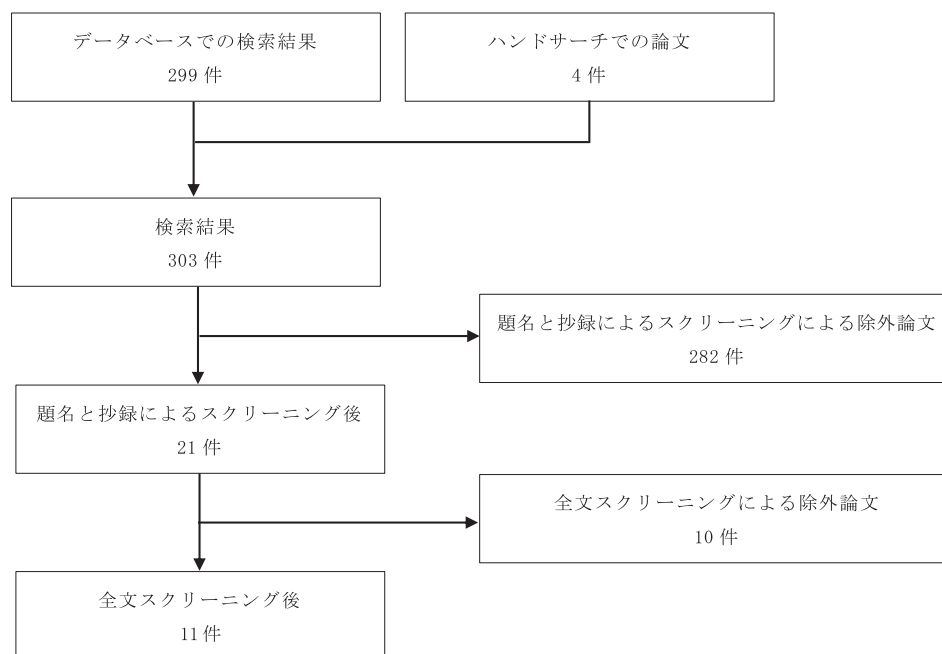


図1 文献抽出のフロー

表2 全文スクリーニングによる除外論文リスト

吉松梓：青年期前期用の身体感覚尺度および社会的体格不安尺度の作成 性別・学年・体格・身体活動レベルによる検討，新潟医療福祉学会誌，2020，19(3)，84-91. 除外理由：研究対象となる概念がHSCと異なる
高柳伸哉，藤生英行：身体感覚増幅とストレス反応が心気症傾向に及ぼす影響 心気症の認知的発展モデルを基にした仮説モデルの検証，健康心理学研究，2006，19(2)，20-28. 除外理由：研究対象となる概念がHSCと異なる
土居正人，齋藤菜摘：HSP（Highly Sensitive Person）と親からの不承認環境要因が自傷傾向に及ぼす影響 推論の誤りによる媒介分析，自殺予防と危機介入，2021，41(1)，18-24. 除外理由：対象者が18歳以上であった
福田佳織：Nursing Child Assessment Teaching Scale（NCATS）を用いた母子自由遊び場面の短時間観察における母親の感性測定の可能性について 子どものアタッチメント安定性との関連性から見たNCATSの有用性，家族心理学研究，2012，26(2)，173-185. 除外理由：研究対象にHSCが含まれなかった
立山清美，中岡和代，石井良和，他：青年・成人用感覚チェックリストの開発 基準関連妥当性および再検査信頼性の検討，感覚統合研究，2018，18，19-28. 除外理由：対象者が17歳～59歳であり、一部18歳以下が含まれるが、主たる対象が成人期であった
船橋亜希：成人用感覚感受性尺度作成の試み，中京大学心理学研究科・心理学部紀要，2013，12(2)，29-36. 除外理由：対象者が18歳以上であった
平野真理：心理的敏感さに対するレジリエンスの緩衝効果の検討—ももとの「弱さ」を後天的に補えるか—，教育心理学研究，2012，60(4)，343-354. 除外理由：対象者が18歳以上であった
高橋亜希：Highly Sensitive Person Scale 日本版（HSPS-J19）の作成，感情心理学研究，2016，23(2)，68-77. 除外理由：対象者が18歳以上であった
松井真由美，徳永瑛子，山西葉子，他：感覚調整と心理社会的状態の関係性に関する研究，感覚統合研究，2020，19，29-37. 除外理由：対象者が18歳以上であった
野井真吾，阿部茂明，鹿野晶子，他：子どもの“からだのおかしさ”に関する保育・教育現場の実感 「子どものからだの調査2015」の結果を基に，日本体育大学紀要，2016，46，1-19. 除外理由：感覚の特性についての言及がなかった

## 2. 対象論文の概要

対象となった論文はすべて2010年以降に出版されたものであった。研究デザインでは横断的観察研究が最も多く8件<sup>6, 8, 13-18</sup>、その他は前向きコホート

研究が2件<sup>10, 11</sup>と記述的観察研究が1件<sup>12</sup>であった。論文の対象者の種類別にみると、乳幼児が4つ<sup>12, 14, 15, 18</sup>、児童生徒が4つ<sup>6, 8, 13, 16</sup>、青年期から成人期人口が1つ<sup>17</sup>、養育者が2つ<sup>10, 11</sup>であった。

表3 対象論文のサマリー

著者・発行年	研究デザイン	対象者	研究目的	研究方法	結果
岐部ら・2019 <sup>6</sup>	横断的観察研究	中学生243人、普通科高校1年生296人、特別科高校1年生403人の合計942人	青年前期の適用を目的とし、中高生を対象としてJapanese version of Highly Sensitive Child Scale for Adolescence (HSCS-A) の作成	(1) 日本語版 HSCS-A の12項目、(2) 日本語版 Ten Item Personality Inventory、(3) 日本語版 PANAS	因子負荷量の低い1項目を除外し、HSCS-A は3因子に一般性因子を含む bifactor model の適合がよいことが示された。また、2つの外的基準尺度と有意な相関を持つことも明らかとなった。
飯村ら・2016 <sup>8</sup>	横断的観察研究	東京都内の中学校1校に在籍する生徒250人	中学生用感覚感受性尺度 SSSI の開発	質問紙調査 (1) 成人版感覚感受性尺度をもとに20項目で作成した原案、(2) 日本語版 Ten Item Personality Inventory、(3) 多次元共感性尺度、(4) 日本語版 State-Trait Anxiety Inventory for Children、(5) 学校ストレス尺度	探索的因子分析の結果、SSSI は2因子構造となることが示された。SSSI は日本語版 Ten Item Personality Inventory との間に有意な相関が認められた。SSSI 得点は右利きよりも左利きの方が有意に高い点数であった。SSSI 得点が平均より+1標準偏差である生徒を HSP 群とし、15.2%が該当した。非 HSP 群と比較した結果、共感性や状態・特性不安、教師との関係、友人ストレスが有意に高かった。
岩田ら・2010 <sup>10</sup>	前向きコホート研究	母子ともに追跡調査が可能であった、初産婦8例、経産婦22例	新生児の敏感性に関する客観的指標と、母親の感じ取っている子どもの性質の比較	母親への質問紙調査： (1) Zung's Self-rating Depression Scale (SDS)、 (2) 子どもの気質尺度  新生児の評定：音、におい、吸啜中断の刺激による心拍増加数	新生児期における刺激に対する客観的評価は、母親回答の子どもの気質尺度と有意な相関を認められず、子どもの易刺激性について母親の評価と客観的評価は異なることが示された。  母親の産後3か月時点のうつの有無と新生児評定は有意な関連は認められなかった。生後3か月時点の気質得点の高低における、母親の産後1週間の SDS 得点には有意な差があった。
岩田ら・2010 <sup>11</sup>	前向きコホート研究	母子ともに追跡調査が可能であった、初産婦8例、経産婦22例	母親の抑うつ状態と子どもの気質が、出生早期の母子相互作用に与える影響を明らかにする	母親への質問紙調査： (1) Zung's Self-rating Depression Scale (SDS)、 (2) 子どもの気質尺度  母子相互作用場面のビデオ録画	母親の感受性、感情表現の質、気分状態、緊張の程度、子へのかかわりの深さ、環境や子の身体反応への配慮、子どもの気分状態において、産後3か月時点で抑うつ傾向にある母親の方が有意に低い得点となった。また、3か月時点の気質得点と母子相互作用評定には負の相関があった。
黒木ら・2019 <sup>12</sup>	記述的観察研究	7か月から36か月までの基礎疾患のない19人	麻痺はないが粗大運動発達の遅れている子どもの感覚面をアセスメントする	日本語版乳幼児感覚プロフィール	低登録の高い子どもが21%、感覚探求の低い子どもが27%、感覚過敏の高い子どもが16%、感覚回避の低い子どもが36%であった。

佐々木ら・2019 <sup>13)</sup>	横断的観察研究	中学1・2年生 160人	認知的側面と感情的側面を持ち社会適応に必要とされる共感性と、感覚処理の関連を明らかにする	(1) フェイスシート、(2) 回答の練習、(3) 日本版青年・成人感覚プロフィール、(4) 青年期用多次元的共感性尺度	クラスター分析の結果、感覚優位・回避群と感覚探求群、低関心群の3つに分けられた。共感性との関連では、敏感さや視点取得で女子の得点が高く、共感的関心では低関心群の女子の得点が高く、個人的苦痛では男女差は見られず感覚優位・回避群が高い得点であった。
志澤ら・2018 <sup>14)</sup>	横断的観察研究	保育所、幼稚園に通う4～6歳児 1678人の養育者	自閉症的傾向と感覚特性などの個人要因と、家庭における養育者の日常の関係性や支援者の有無などによる環境要因を含め、多要因の関連を検討すること	(1) 基本属性、(2) 日常生活における子供の食行動、(3) 対人応答性尺度日本語出版準備版(SRS)、(4) 日本感覚インベントリー (JSI-R)、(5) 育児環境指標 (ICCE)	JSI-R 下位項目の固有受容覚のみ性差が認められた。重回帰分析の結果、子供の食行動の問題数と有意な正の関連があった変数はSRS得点とJSI-Rの味覚、聴覚、ICCEの人的かかわり、社会的サポートであった。負の関連があった変数は、JSI-Rの嗅覚ときょうだい、年齢、性別であった。
中村ら・2016 <sup>15)</sup>	横断的観察研究	1～3歳の保育所に通う子ども 76人	感覚や関係性の困難さが子供に与える影響に着目し、調整や適応が可能な行動を調査する	(1) 乳幼児感覚プロフィールのうち口腔感覚に関連する6項目、(2) 乳幼児期社会性と情緒のアセスメント	口腔内感覚処理と食事の問題行動に有意な負の相関があった。また重回帰分析においても、母子分離の困難さと口腔内感覚処理はそれぞれ食事の問題行動に影響を与えていた。
徳永ら・2010 <sup>16)</sup>	横断的観察研究	6～12歳の児童 850人	学齢児のJSI-Rスコアを因子分析し、感覚刺激への反応パターンを明らかにし、感覚処理過程の問題をとらえる評価軸をつくるための基礎データを収集する	JSI-R	JSI-Rの結果を因子分析した結果、13因子が抽出された。
梅田ら・2013 <sup>17)</sup>	横断的観察研究	全国28都道府県において、過去に頭部外傷の経験や精神・神経疾患の罹患歴がない11歳から82歳までの1198人	日本語版青年・成人用感覚プロフィール (AASP) の信頼性の検証と、年齢帯ごとの標準値およびカットオフ値を検討する	自己評定形式のAASP60項目	すべての項目が下位尺度の構成項目として機能していた。年齢帯ごとの各象限においても十分な内的整合性が示された。いずれの象限も年齢が上がるにつれ平均値が低下していた。特に低登録における低下が顕著であり、11～17歳から55～82歳にかけて約0.5SD分の低下がみられた。また、年齢帯ごとの各象限についてパーセンタイルに基づいたカットオフ値が示され、いずれの象限も高年齢帯ほどカットオフ値が低くなる傾向が認められた。
北村ら・2017 <sup>18)</sup>	横断的観察研究	生後2ヶ月～1歳6ヶ月までの乳幼児をもつ初産婦 1157人と経産婦 884人	母親がもつ予期不安・期待感と乳児の刺激敏感に影響する要因を明らかにする	(1) 基本属性、(2) 予期不安・期待感尺度、(3) 乳児の刺激敏感尺度	母親の予期不安・期待感と乳児の刺激敏感に影響する因子を検討するため、母親の属性を説明変数として重回帰分析を行った。予期不安・期待感には、母親の年齢や初・経産婦、子どもの月齢、不妊治療、喫煙が関連していた。乳児の刺激敏感反応には、初・経産婦や子どもの月齢、子どもの栄養、世帯年収が関連していた。



### 3. 知見の概要

論文に記載された目的と結果から、対象論文の知見は3種類に分類された。1つ目はHSCもしくは感覚過敏を持つ小児のアセスメントや関連要因の検討を行ったもの<sup>12-15)</sup>、2つ目は感覚特性と関連した尺度の開発及び信頼性の検討を行ったもの<sup>6, 8, 16, 17)</sup>、3つ目は小児の特性と母親の心理状態との関連を検討したもの<sup>10, 11, 18)</sup>であった。

小児のアセスメントや関連要因の検討を行った研究では、感覚過敏の小児が16%存在すること<sup>12)</sup>や感覚の特性の一部に男女差があることが示されている<sup>13)</sup>。また、小児の食事に関連した問題行動と感覚特性に着目し、味覚や嗅覚以外に、聴覚や口腔内感覚が影響を与えていることを示唆している<sup>14, 15)</sup>。

HSCと関連した尺度開発にかかる研究では、Aronらが開発した尺度の日本語版もしくは他年齢版の開発を行ったもの<sup>6, 8)</sup>と、発達障害児者向けに開発された感覚プロフィールの青年・成人用の信頼性の検証を行ったもの<sup>17)</sup>、日本感覚インベントリーの因子構造を検討したもの<sup>16)</sup>が含まれた。

小児の特性と母親の心理状態との関連を検討した研究では、新生児期の刺激に対する客観的評価と母親の評価が異なる可能性が示唆された<sup>10)</sup>。一方で、母親が評価した小児の気質の難しさと母子相互作用には負の相関があることが示されている<sup>11)</sup>。また、母親が評価した小児の刺激への敏感さには、小児の月齢や栄養状態のほか、母親の出産経験や世帯年収が影響していることが示唆された<sup>18)</sup>。

## IV. 考察

この文献検討ではHSCに関する研究の知見をまとめ、養育者や支援者が抱える課題と研究の限界を明らかにすることを目的として実施したが、対象となる論文数は11件にとどまった。このことは、本邦におけるHSCに関連した研究が十分実施されていないことを示唆している。また、HSCの養育者に関する研究は含まれていたものの、横断的観察研究で小児の特性と養育者の特性および家族状況の関連を検討したものであり、養育者の抱える課題を明らかにしたものは含まれなかった<sup>10, 11, 18)</sup>。加えて、HSCの支援者に関する研究は包含されなかった。このことは後述するHSCの定義が成熟していないこととも関連していると考えられる。そのため、この文献検討ではHSCもしくは感覚の過敏をもつ小児の養育者と

支援者の課題を明らかにすることはできなかった。

今回、包含された論文の中でHSCもしくはHSPを明確に示唆していたのは2件のみ<sup>6, 8)</sup>であり、感覚の過敏に関して、小児の気質特性としてとらえている論文<sup>10, 11, 18)</sup>や発達障害の特性に含まれる形で感覚特性と捉えている論文<sup>12, 14, 16, 17)</sup>が多かった。このことは、HSCの定義が十分に定まっていないことに関連していると考えられる。Aronらは感覚処理感受性の概念を提唱し、HSPおよびHSCを把握する方向性を示した<sup>1)</sup>。しかし、疾患分類などの診断と異なり、HSPおよびHSCを明確に定義することは難しい。そのため、自分の子どもや自分自身が感覚の過敏を持っており、HSCに該当するかもしれないと考えている人は存在するが、客観的に評価されることは珍しい。そのため、HSCのみを対象とした研究を実施することは現実的には難しく、今回の文献検討でも包含されなかった。一方で、感覚処理感受性とHSCの概念をもとにした尺度の開発は進んでおり<sup>6, 8)</sup>、今後の研究では尺度得点からHSCと考えられる者を対象とした研究の実施が期待される。また、尺度を用いて小児の特性を客観的に捉えることで、養育者や支援者が抱える困難さや課題についても検討をすることができると考えられる。

ただし、今後の研究において、養育者が回答する小児の感覚の特性が、生理学的指標や客観的指標が一致するわけではない点については注意が必要である<sup>10)</sup>。HSCの生理学的な研究が進められており、特性と生活上の困難を正確に捉えることのできる方法論を確立することが、HSCへの支援を検討するうえで重要となる。

また、乳幼児では、自身の感覚や生活のしづらさについて言葉での説明や質問紙への回答が難しく、啼泣や不機嫌などの行動として表現されることが考えられる。本人が何に困っているのかが明確ではないことが、保護者や支援者の困り感につながっていると推測される。そのため、現状では、HSCであることの判別に焦点を当てるのではなく、発達障害や感覚の特性を持つその他の疾患と併せて、個々人の生活上の困難に合わせた支援方法について保護者と支援者で協力して検討していくためのアプローチや調査研究が求められる。

### 謝辞

本論文の作成に当たり、文献収集に協力していただいた高橋ちあきさんに心より感謝申し上げます。

なお、本論文に関して開示すべき利益相反事項はない。

## 文献

- 1) Aron, A.E., Aron, A.: Sensory-processing sensitivity and its relation to introversion and emotionality, *J Pers Soc Psychol*, 1997, 73(2), 345-368.
- 2) 高橋 亜希: Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSPS-J19) の作成, *感情心理学研究*, 2016, 23(2), 68-77.
- 3) 上野 雄己, 高橋 亜希, 小塩 真司: Highly Sensitive Person は主観的幸福感が低いのか? 感覚処理感受性と人生に対する満足度、自尊感情との関連から, *感情心理学研究*, 2020, 27(3), 104-109.
- 4) 土居 正人, 齋藤 菜摘: HSP (Highly Sensitive Person) と親からの不承認環境要因が自傷傾向に及ぼす影響 推論の誤りによる媒介分析, *自殺予防と危機介入*, 2021, 41(1), 18-24.
- 5) Pluess, M., Assary, E., Lionetti, F., et al: Environmental sensitivity in children: Development of the Highly Sensitive Child Scale and identification of sensitivity groups, *Dev Psychol*, 2017, 54(1), 51-70.
- 6) 岐部 智恵子, 平野 真理: 日本語版青年前期用 敏感性尺度 (HSCS-A) の作成, *パーソナリティ研究*, 2019, 28(2), 108-118.
- 7) 船橋 亜希: 成人用感覚感受性尺度作成の試み, *中京大学心理学研究科・心理学部紀要*, 2013, 12(2), 29-36.
- 8) 飯村 周平: 中学生用感覚感受性尺度 (SSSI) 作成の試み, *パーソナリティ研究*, 2016, 25(2), 154-157.
- 9) 平野 真理: 心理的敏感さに対するレジリエンスの緩衝効果の検討—もともとの「弱さ」を後天的に補えるか—, *教育心理学研究*, 2012, 60(4), 343-354.
- 10) 岩田 裕美, 森岡 由起子, 齊藤 由紀子: 出生早期の母子相互作用に影響を及ぼす要因について (第1報) 母親の抑うつの変化と子どもの易刺激性に関する検討, *母性衛生*, 2010, 51(2), 448-455.
- 11) 岩田 裕美, 森岡 由起子, 齊藤 由紀子: 出生早期の母子相互作用に影響を及ぼす要因について (第2報) 母親の抑うつ状態および子どもの気質 (易刺激性) と母子相互作用について, *母性衛生*, 2010, 51(2), 456-464.
- 12) 黒木 香那, 嘉納 真優, 田中 覚: 運動の遅れを主訴に当院初診された児を対象にした日本版乳幼児感覚プロフィール (ITSP) を使用した感覚面の評価, *小児保健かごしま*, 2019, 32, 20-22.
- 13) 佐々木 愛, 宮野 素子: 中学生における感覚処理と共感性の関連, *秋田大学臨床心理相談研究*, 2019, 18, 21-25.
- 14) 志澤 美保, 義村 さや香, 趙 朔, 他: 幼児期の食行動に関連する要因の研究 自閉症的傾向、感覚特性および育児環境に焦点をあてて, *日本公衆衛生雑誌*, 2018, 65(8), 411-420.
- 15) 中村 勇, 星 出てい子, 岩本 浩二, 他: Adaptive development of oral sensation and its relationships with behavior problem during meals and mother-child separation in infancy, *茨城県立病院医学雑誌*, 2016, 32(2), 1-7.
- 16) 徳永 瑛子, 岩永 竜一郎, 太田 篤志: JSI-R (日本感覚インベントリー) の学齡児データの因子分析, *感覚統合研究*, 2010, 13, 35-44.
- 17) 梅田 亜沙子, 伊藤 大幸, 岩永 竜一郎, 他: 日本版青年・成人感覚プロフィールの標準化 信頼性および標準値の検討, *臨床精神医学*, 42(6), 789-796.
- 18) 北村 亜希子, 小田 慈: 乳幼児健診に参加した母親の予期不安に影響する要因の検討 母親へのアンケート調査結果より, *新見公立大学紀要*, 2017, 38, 39-44.